

日本の細菌学の父「北里柴三郎」

肥後国阿蘇郡小国郷北里村(阿蘇郡小国町)に生まれる。父は庄屋を務めた、母は柴三郎の教育に関して甘えを許さず、親せきの家に預けて厳しい躰を依頼したと言う。後に現・東京大学医学部に進みさらにドイツへ留学する。コッホに師事し業績を上げて帰国、伝染病予防と細菌学に取り組む。その考え方は、「実際に役立つ学問が、真の学問である」というものだった。その後大正12年日本医師会の創立者であり、初代会長を務めた。

マンスフェルトとの出会いが医学の道へ

- *1869年細川藩の藩校時習館に入寮した、しかし翌年廃止された。そこで熊本医学校に入学した。その教師マンスフェルトに出会ったことをきっかけに、本格的に医学に目覚める。
- *明治8年(1875)現・東京大学医学部へ進学、教授の論文に口をだしていたため大学側と仲が悪く、何度も留年した。卒業時の成績は26名中8位であった。
- *在学中に「医者使命は病気を予防することにある」と確信する。

ドイツに留学

- *明治18年(1885)ドイツのベルリン大学留学。ロベルト・コッホに師事し業績を上げた。
当時、破傷風が恐れられていて50%が死にいたった。北里はこの菌の培養に名乗りを上げ → 純粋培養を試みるが雑菌を取り除かなくてはならず、困難を極めた。
- *そんな中、明治22年(1889)彼は「亀の子シャーレ」を考案して、酸素のない所で破傷風菌の純粋培養に成功する。翌年には破傷風菌抗毒素を発見し、世界の医学界を驚嘆させた。さらに血清療法という、破傷風の病原菌を少しずつ動物に注射しながら、血清中に抗体を生み出す画期的な手法を開発した。
- *明治23年(1890)には血清療法をジフテリアに応用して、同僚であったベーリングと連名で「ジフテリア免疫と破傷風免疫の成立について」という論文を発表。これが第一回ノーベル生理学・医学賞の候補となった。が、ベーリングのみが受賞した、この当時は共同受賞と言う考えはなかった。

帰国後の活動

- *安政6年(1859)に開国 → 文明開化 → コレラ・赤痢などが流行 (コレラは得体のしれない怪獣として描かれている)
- *明治25年(1892)帰国、国内に伝染病が蔓延していた。当時は対処療法で、コレラ死亡者がどんどん増えていた。
- *帰国した柴三郎は母校東大医学部と対立し、活躍の場が限られてしまう。これを知った福沢諭吉の援助により、私立伝染病研究所が設立され柴三郎は初代所長となる。
- *明治27年(1894)にペストの蔓延していた香港に政府より派遣され、病原菌であるペスト菌を発見するという業績を上げた。
- *私立伝染病研究所が成果を上げることで国が着目し、大正3年(1914)柴三郎にいきさきの相談もなく私

立伝染病研究所を文部省に移管し、東大の下部組織にした。

*これに反発して柴三郎は所長を辞任して、新たに私費を投じて大正 4 年「私立北里研究所」を設立する。シンボルマークは破傷風菌マークが二つ並ぶデザインを採用。そして、狂犬病、インフルエンザ、赤痢、発疹チフスなどの血清開発に取り組んだ。柴三郎は野に下り研究を続けるが、世界的にみればこれまで世界は民間が常にリードしてきた。

*大正 3 年の日記には、自分は野に下るがみなは残り伝染病の研究を続けてくれとあいさつしている。しかし、35 人が辞職さらに他の職員も含めおよそ 100 人が柴三郎の下に走った。

*福沢諭吉の没後の大正 6 年(1917)、諭吉の多大なる恩義に報いるため、慶応義塾大学医学部を創設し、初代医学部長となる。新設の医学部の教授にはハブの血清療法で有名な北島多一、赤痢菌を発見した志賀潔など名だたる教授陣を送りこんだ。

*大正 6 年(1917)柴三郎が初代会長となり大日本医師会が誕生した。その後大正 12 年(1923)に医師法に基づく日本医師会となり、柴三郎は初代会長としてその運営にあたった。

*柴三郎は赤痢、チフス、狂犬病で成果を上げ多くの命を救った。彼の研究は「人命を救うことに集中した」生涯だったと言える。

NHK-BS「英雄たちの選択」、ウィキペディアより